8. 甲状腺原発悪性リンパ腫のRIおよびUS像の検討

中駄 邦博 塚本江利子 永尾 一彦
伊藤 和夫 古舘 正従 (北大・核)
丁字 清 陳 敏華 入江 五朗
(同・放)
上北 洋一 熊井 稔 (旭川市立病院・放)
水尾 秀代 伊藤 義雄
(勤医協札幌病院・放)

甲状腺原発の悪性リンパ腫のRIおよびUS像について，治療開始前に検査が施行された4症例を対象として検討した．悪性リンパ腫の病巣部は^{201}Tlシンチグラフィではdelayed scanで非常に強い^{201}Tlの残存を示し，^{67}Gaシンチグラフィでは肝よりも強い腫瘍への^{67}Ga集積を認め，USでは嚢胞とは異なるが非常に低い内部エコーを伴う結節として認められた．これらは今回の対象例についてほぼ共通の所見であった．他疾患との鑑別の点では問題が残ったが，これらの所見は甲状腺原発の悪性リンパ腫に，ある程度特徴的なものであろうと思われた．

9. ^{123}I甲状腺シンチグラフィ上hot noduleを呈した甲状腺癌の1例

星 章彦 (東北厚生年金病院・放)
高橋 優 (同・外)

ヨードによる甲状腺シンチグラフィにおいて，hot noduleを呈する場合多くは機能性腺腫であるが，甲状腺癌がhot noduleを呈した稀な1例を経験したので報告する．

症例は43歳の女性で，1990年1月甲状腺の腫脹を主訴に来院．甲状腺左葉にϕ2 cmの弾性硬の境界明瞭な腫瘤を触知．^{123}I甲状腺シンチグラフィにて左葉下部にhot noduleを認め，周囲の正常甲状腺の集積は低下，^{201}Tl甲状腺シンチグラフィでも同部にhot noduleを認めたがwashoutの遅延は認めなかった．CTでは辺縁明瞭な円形の低吸収域で軽度の造影剤増強効果を認めたが，石灰化は認めなかった．機能性腺腫の疑いにて手術したところ，病理組織学的にはほぼ腫瘤全体に異型な乳頭状増殖を示しており乳頭癌であった．

10. 原発性アルドステロン症兼クッシング症候群の一例

山本 理佳 及川 英樹 寺薗 公雄
丸岡 伸 中村 護 坂本 澄彦
(東北大・放)

症例は36歳女性．高血圧，低カリウム，低レニン，高アルドステロン血症等が認められた．副腎CTで右副腎に径2 cm大の腫瘤があり，原発性アルドステロン症が疑われた．デキサメサゾン抑制下^{131}Iアドステロール副腎皮質シンチで右副腎の取り込み増加と対側の抑制がみられた．また精査により血中コルチゾール増加，ACTH抑制その他等からクッシング症候群の合併が確認されたため，抑制なしの副腎シンチを施行．同様の像を呈した．径2 cm大，割面黄色調の腫瘍が摘出されPA, CS両方の性格の混在する腺腫であった．複数のホルモン過剰症を合併する副腎腺腫はきわめて稀である．このような腺腫では分泌されるホルモンによりシンチ像が互いに影響される可能性が推測される．

11. 悪性黒色腫における^{123}I-IMPの臨床評価

星 宏治 鈴木 晃 加藤 和夫
佐藤 勝美 (福島医大・核)
水越 仁志 木村 和衛 (同・放)
長谷川隆哉 佐瀬 裕 小野 一郎
金子 史男 (同・皮膚)
酒井 正典 加藤桂一郎 (同・眼)

悪性黒色腫7例（術前症例4例，再発例2例，経過観察例1例）に^{123}I-IMPを施行し，同時期に検査した^{67}Gaと比較し，その有用性について検討した．IMPは，111 MBq (3 mCi)を静注し，4時間後と24時間後に撮像を行った．原発巣描出能は，IMP 75% (3/4), Ga 25% (1/4)と前者が優れていた．また，IMPで描出できた最小腫瘍径は10×6 mmであった．再発・経過観察例には，両核種の併用がより有用と考えられた．なお，IMP静注4時間後と24時間後の画像では，病変の描出能において明らかな差はなく，症例間でのバラツキが認められた．

Presented by Medical*Online